戦後思想の名著50
平凡社 2006.2.10

主婦の思想

上野千鶴子

日本のフェミニズムはしょせん主婦フェミニズムだった、と総括したのは塩田咲子（『日本の社会政策とジェンダー』日本評論社、二〇〇〇年）だが、「しょせん」だったのか、それとも「でさえも」だったのか。一九六三年のベティ・フリーダン『女らしさの謎』から始まったウーマンリブこと第二波フェミニズムは、もともと中産階級の既婚女性、すなわち専業主婦の「名前のない問題」から始まった。それは社会主義婦人解放論のなかにあった、「労働を通じての経済的自立」を至上命題とする女性解放とは異なる解放のイメージを、当初からはらんでいた。

日本のリブを担ったのは、主として未婚の若い女性たちだったが、既婚女性がリブのメッセージに揺さぶられないわけではなかった。一九七〇年代の前半から、日本にはいわば主婦リブと呼ぶべき一群の担い手たちが登場する。『おんな・エロス』で「主婦的状況を撃つ」と特集を重ねた女性たちや、雑誌『あごら』に拠る既婚女性たち、また田中喜美子が主宰する主婦の投稿誌、『わいふ』の息長い活動など。田中によれば、日本の女たちは解放を求めても、夫や子どもをけっして捨てたりしない。リブの勇ましいかけ声に踊らされず、「たらいの水ごと赤子を流す」愚を犯すことなく、保守的に見えながら確実に変化してきた、と言う。『わいふ』の投稿者たちのなかから、木下律子『王国の妻たち――企業城下町にて』（径書房、一九八三年）や結木美砂江『二、三才児のママはたいへん』（汐文社、一九九一年）などの書き手が育った。

私は自分が編者の一人に加わった岩波書店刊行のアンソロジー、『日本のフェミニズム』第一冊「リブとフェミニズム」の巻に、「主婦リブ」と題する章を設け、伊藤雅子、高橋ますみ、田中喜美子の三人を取りあげている。伊藤は主婦ではないが、公民館職員として『主婦とおんな』（本書収録）という画期的な集団の記録を送りだした仕掛け人、高橋は東海あごらの会員として「主婦の殻を破るセミナー」を主宰、『女四〇歳の出発――経済力をつける主婦たちの輪』（学陽書房、一九八六年）を著した草の根の活動家、田中は『わいふ』の編集・発行人である。

伊藤は「現在主婦である女だけでなく、まだ主婦ではない女も、主婦にはならない女も、主婦になれない女も、主婦であった女も、主婦であることからの距離で自分を測っているかぎりは、主婦から自由になれない」と喝破した。リブのインパクトを受けて成立した七〇年代の女性学は、初めて「主婦という暗黒大陸」を研究の主題として発見し、主婦研究は女性学の中心課題となった。

日本には各地に有名無名の無業の既婚女性、つまり専業主婦と呼ばれるアクティビストやキーパーソンがいる。彼女たちは必ずしも女性問題を主題としているわけではないが、反核運動や環境保護、食品の安全やリサイクルなどの問題を通じて、現代社会のしくみに根源的な疑問を持ち、活動をつづけてきた人々である。驚くべきは、この能力とエネルギーのきわだった人々が、日本ではまったくの無位無冠であることだろう。彼女たちは専業主婦ではあるがけっして家事専業ではなく、むしろ市民活動や地域活動を行うために、積極的に無業であることを選んだ女性たちである。彼女たちは「出歩く主婦」、「家内」ではなく「家外」と呼ばれた。こういう女性たちに、「活動専業・主婦」と卓抜な命名を与えたのは芝実生子である。

こういう女性たちがつちかってきた思想を、「生活者の思想」と呼んだのは天野正子である。それをもっとも先鋭に運動化し政治化したのは、生協運動のなかの女性たちだった。彼女たちは、消費者運動のなかから労働者生産協同組合（ワーカーズ・コレクティブ）を立ち上げ、さらに「生活者ネットワーク」という政治団体を結成して、地方政治のなかに参入していくに至る。その過程で、代理人制度や議員歳費の共有などの、前例のない政治手法を編みだした。ローカル・パーティとしての生活者ネットワークの政治力には、いまやあなどりがたいものがある。

もちろん妻であり母であることを起点とする主婦の運動と、フェミニズムとのあいだの関係は、必ずしも親和的とは言えない。何より彼女たちの活動を可能にしている経済基盤は、仕事専業の夫たちによって支えられており、主婦の存在は資本主義的な経済システム

から自由であるどころか、そのしくみのなかにまるごと抱えこまれている。他方フェミニストは、その性別役割分担をもっともきびしく批判してきたのだから、主婦フェミニズムとは論理矛盾のかたまりであろう。だが、女のマジョリティが選ぶ（あるいは選ばされた）ライフコースのなかで、自分では変更しようのない現実を与件として、そのなかで自分の志を最大化しようとするこの女性たちの思想と実践を評価することなしには、戦後思想は大きな欠落を抱えることになるだろう。

九〇年代以降、主婦を支える夫たちの経済力は急速に低下し、専業主婦そのものがもはや歴史的に成り立たない時代となった。それだけでなく晩婚化・非婚化の波のなかで、主婦であることを選ばない若い女たちが大量に登場しつつある。主婦の思想は、その担い手ごと、歴史的に一過性の存在となりつつある。

網野善彦

無縁・公界・楽

日本中世の自由と平和

平凡社、1978年
平凡社、1987年（増補版）
平凡社ライブラリー、1996年

鹿島 徹

◉目次

一　「エンガチョ」
二　江戸時代の縁切寺
三　若狭の駈込寺――万徳寺の寺法
四　周防の「無縁所」
五　京の「無縁所」
六　無縁所と氏寺
七　公界所と公界者
八　自治都市
九　一揆と惣
十　十楽の津と楽市楽座
十一　無縁・公界・楽
十二　山林
十三　市と宿
十四　墓所と禅律僧・時衆
十五　関渡津泊、橋と勧進上人
十六　倉庫、金融と聖
十七　遍歴する「職人」
十八　女性の無縁性
十九　寺社と「不入」
二十　「アジール」としての家
二十一　「自由」な平民
二十二　未開社会のアジール
二十三　人類と「無縁」の原理

戦後思想の名著50

編者……岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一
発行者……下中直人
発行所……株式会社平凡社
〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
電話 東京03(3818)0741〔編集〕
03(3818)0874〔営業〕
振替 00180-0-29639
印刷・製本……中央精版印刷株式会社
発行日……2006年2月10日 初版第1刷

©Minoru Iwasaki, Chizuko Ueno, Ryūichi Narita 2006 Printed in Japan
ISBN4-582-70258-9
NDC分類番号121.6 四六判(19.4cm) 総ページ646

乱丁・落丁本のお取替えは直接小社読者サービス係までお送りください
(送料は小社で負担します)。
平凡社ホームページ http://www.heibonsha.co.jp/

編者紹介

岩崎 稔（いわさき みのる）
1956年生まれ。東京外国語大学外国語学部教授。哲学、政治思想史。主な共編著書に、『激震！国立大学——独立行政法人化のゆくえ』（未来社、1999年）、『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』（青弓社、2005年）など。

上野千鶴子（うえの ちづこ）
1948年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。ジェンダー論、セクシュアリティ研究、家族社会学。主な著書に、『女遊び』（学陽書房、1988年）、『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、1994年）、『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1998年）、『差異の政治学』（岩波書店、2002年）、『老いる準備——介護すること されること』（学陽書房、2005年）、『生き延びるための思想』（岩波書店、2005年）など。主な編著書に、『ラディカルに語れば…——上野千鶴子対談集』（平凡社、2001年）、『構築主義とは何か』（勁草書房、2001年）、『脱アイデンティティ』（勁草書房、2005年）など。

成田龍一（なりた りゅういち）
1951年生まれ。日本女子大学人間社会学部教授。日本近現代史・文化史。主な著書に、『歴史学のスタイル——史学史とその周辺』（校倉書房、2001年）、『〈歴史〉はいかに語られるか——1930年代「国民の物語」批判』（日本放送出版協会、2001年）、『近代都市空間の文化経験』（岩波書店、2003年）など。主な共編著書に、『総力戦と現代化』（柏書房、1995年）、『20世紀日本の思想』（作品社、2002年）、『岩波講座 アジア・太平洋戦争——なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』（岩波書店、2005年）など。